



第 21 号
平成七年
(1995)
10月15日 発行
(年4回発行)

猫藪会式目の整理

東明雅

従来、猫藪会には式目は存在したが、それを整理した式目表とでも言うべきものはなかった。唯一、「二十韻季題配置表」のカードの裏にある「句数式付去嫌」・「式目歌」はその代用であったが、近頃、その不備を痛感するようになった。

たとえば、「式目歌」の第一首「衣季や竹田の船路夢泪月松枕五句隔べし」などは、古い連歌の時代からの伝統を残したものであるが、現代人には意味も理由も分からぬだろう。それで、現在猫藪会で使っている式目類を整理して一覧表にしたが、左の通りとなった。式目を新しく制定しようなんて大それた考えは毛頭ない。従来我々がやって来た方法を整理したまでである。大方のご参考になれば幸いである。

猫藪会式目

一 心得

式目は翁の「歌仙は三十六歩なり。一步も後に帰る心なし」を旨とし、すべての事象が輪廻にならぬよう注意する。

二 句数

1 句数は春秋三句より五句（普通三句）、夏冬一句より三句（普通二句）とし、季戻りを嫌う。

2 恋句は二句より五句続く。一句で捨てない。

三 去嫌

1 同季春秋は五句去り、夏冬は二句去り。その他、月・夢・涙など特に印象の強い文字は五句去り。

2 同字・神祇・釈教・恋・無常・述懐・懐旧・妖怪・病体・時分・夜分は三句去り、その他の題材は二句去りである

が、なるべく同じような題材は離して用いるようにする。

3 人情自、人情他、人情自他半、人情無

(場)の各打越および綺を嫌う。

4 片仮名・アルファベット・数字の打越を嫌う。

四 一巻の構成

1 発句は当季とし、切字を入れる。

2 脇句は発句と同季、同時刻、同場所とし、体言止めが普通。

3 第三は「て、に、にて、らん、もなし」止めが普通。

4 発句使用字（月、花を除く）、及び恋の字は一巻再出を嫌う。

5 発句以外に切字「や、かな」を嫌う。表に神祇、釈教、恋、無常、述懐、懐旧、妖怪、病体、人名、地名を嫌う。

6 但し発句はこの限りではない。

7 月の定座はオ五、ウ七、ナオ十一（二十韻ではウ一、ナオ五）とし、場合によって引き上げることもこぼすことも自由であるが素秋を嫌う。

8 花の定座はウラ十一、ナウ五（二十韻ではナウ三）とし、引き上げることはあってもこぼさない。

9 恋は一巻に必ず出す。ウラおよびナオにそれぞれ一回出すのが普通である。

10 二十韻ではどちらか一回でもよい。体言止めまたは用言止めの五連続を嫌う。

11 挙句は発句に返らぬよう特に注意する。

五 韻律

短句下七の四三および二五を嫌う。

六 仮名遣

歴史的仮名遣・現代仮名遣どちらでもよいが、その混用を嫌う。

能と連句

奥村 富久子

能の道に入ったのは十三歳。俳句を学び始めたのは十五歳の頃であった。

どちらも余白、余情を大切にするとところが似ている。

普通の人の煩惱が百八つなら、私のは百二十、三十は有るのではと、友達と笑い合った筈なのに、なぜか此のような道に御縁があり、一つは生涯の仕事に、後の一つは、世盛りの忙しさに途絶えた時はあっても、終生関わり続けることになったのは不思議なことである。

背景は松を描いた鏡かがみ板いたばかり、小道具類は単純化したものをほんの少し使うばかりの能では、技も極限まで抑制され、炎ゆる情念、無量の悲哀、怨念さえ秘められて奥深い。

その幽かな動き、一見無表情に見える能面のわづかな照り戻りに、心豊かな見所けんじょのお客さま方は、思い思いの夢を描かれる。

時には能役者と観客の想いが一つに重なり、舞台から見所へ虹の橋が架かることもある。その喜びは譬えるものもない。

俳句もまた最も短い詩として、余情を尊ぶことは能と同じであるけれど、発句が俳句として独立し、花鳥諷詠を本意とする風潮の中で、私には何か胸の中に燃え尽くせぬ塊の様

なものを抱き続けていた。

同じ能役者であった夫の死と共に、能を舞い納めて十年。身心の充実あってこそ勤め得る能に、この時点で終止符を打ったことについて、悔いは少しも残らないけれど、実生活においては、自分の美意識だけを頑なに守って不器用に生きながらも、これまで舞台の上では、皇女にも貴妃にも、また遊女にも、老残の小野小町にさえ変化して、様々な性を生き、この世の悲喜を深く味わうことが出来たのであったと、今更に思い知るのであった。

思いもかけず連句にめぐり会えたのは、五年ばかり前のことである。

能と同じ序破急の流れも、自然にうなづけたし、「月の座」「花の座」そして「恋」が大切にされるのも嬉しく、ここでもまた、我ならぬ我を生きられるのが楽しい。

付合いの面白さ、心通う連衆との風の交り。過ぎし日、能公演で渡英した折。果てしなくつづく草原に架かる円虹を見て、峰から峰へ架かるものとばかり思っていた私は、莊嚴とも言える感動を覚えたけれど、心の友と巻き上げる連句の一卷は、正に此の円虹ではないだろうか。

世の修羅を外に、連句に遊ぶことは、今の私にとって、何よりの喜びである。たとえそれが下手の何とやらであろうとも。

(能楽師・茨の会)

山をいで羽の初茄子

登坂 かりん

全国新庄連句大会直後、猫養会有志九名と、最上川の見えつ隠れつする陸羽西線に乗り込んだのは九月二日。酒田に本間美術館、山居倉庫、土門記念館と訪ね、大川周明碑の建つ日和山口から暮れてゆく庄内平野をバスは月山など秀嶺を窓外に湯田川温泉へ。昔ながらの湯治宿では方頭魚かまがしりなど馳走と庄内弁に心身に寛いだ。

翌日は石原莞爾、丸谷才一の生誕地を車窓に見、致道館から城址公園へと心地よい風頬を撫でられながら歩いた。

車は降りなかったが、芭蕉乗舟地跡の奥には、「羽黒を立ちて、鶴が岡の城下、長山氏重行といふ武士あまのよの家に迎へられて」巻いた、めづらしや山をいで羽の初茄子 芭蕉

蝉に車の音添る井戸

重行

の一卷の発句の碑が建つ長山邸跡がある。

江戸勤番中、深川の芭蕉庵に出入りした重行は、来鶴の翁を篤くもてなしたのである。

さて平成の猫養のご連衆も、民田たみだの茄子に舌鼓うち、藤沢周平描く海坂藩(庄内藩)の酒井家御隠殿にて蝉しぐれを聴き昼食。黒きマリアの天主堂も拝し、人面魚はまたも拝みそこなつたが、夕刻迫る頃、庄内空港より帰途についた。

「ローマ連句サロン」発足

下鉢 清子

日・伊俳句交流団の最終打合せの折、日程に連句の会が組み込まれており、捌きをとお話と共に連衆名を手渡されたとき、ローマでは東明雅先生ご考案の「二十韻」でと心づもりが出来上がっていた。慌しいスケジュールの中少ない持ち時間で、俳諧の醍醐味に浸り歌仙の序・破・急の流れを崩さずに楽しむには、「二十韻」は最も相応しい型式である。

六月十五日、ローマ日本文化会館で、「第二回、日・伊俳句交流の集い」が開かれたが、翌六月十六日に体験した初の日・伊連句の集いについて述べて置きたいと思う。

私はこの時点まで、イタリアの著名なる詩人二人が参加されるとは夢にも思っていなかった。ジェノヴァ大学教授エドアルド・サングイネーティ、ローマ俳句友の会事務局長カール・ヴァージオの両氏とは、前日の会で顔馴染となり俳句に対する蘊蓄に驚かされていたが、連句については初体験で興味津々の様子。先ずこの形式と忠男氏から頂いた発句について説明することから始まった。

エドアルド氏にはエットレ・コロ氏が、カルラ女史には野尻命子氏が通訳として付き、詩の直訳を荒木氏が受け持った。前句が十分

に理解されなければ付句は生まれないので、

詩人達は入念に質問を繰り返して、伊語に転換

した後も用語の良し悪しを議論し合う。脇句

「南風のつばくろ」を、通訳が「南風が連れて来た燕」と訳したので、話は地中海にまで

拡がり侃々諤々、三時間の持ち時間内で満尾

するであろうかと危惧が脳中を走る。併し詩

人の感性のすばらしさ研ぎ澄まされた知性は、

忽ちに余韻、余情を掴み取るようになり、後

は一瀉千里、詩人が書く↓荒木氏が直訳する

↓黒田杏子氏と私が長句・短句にワープロす

るという目まぐるしい作業に没頭させられた。

4 楽しい曲が聞こえる／十一人の詩人に
楽しき曲に詩人集ひぬ

5 吾が指の間に／まだ開かぬ文／月光に
月清しいまだ開かぬ文を掌に

短句には二行詩を、長句には三行詩を作り、熱中した詩人に負けじと、通訳もわが詩を披露する。エットレ氏は日本文学専攻の経験と、ヴェニチア出身の誇を持つ人であるから、見事な恋句で答えてくれた。

外国語音痴の私が初の日・伊連句交流の捌

をなし得たのは、荒木ヴァチカン大使の水も

漏らさぬ企画並びに連衆のお陰と、改めて感

謝申し上げる。帰国後、「ローマ連句サロン」

発足と、東先生が顧問として迎えられたお知

らせがあり、何より嬉しいことであった。

二十韻「金雀枝」

下鉢 清子 捌

金雀枝に碎ける天の光かな

荒木忠男

窓近く飛ぶ南風のつばくろ

下鉢清子

アンティーク大皿小皿運ばれて

黒田杏花

たのしき曲に詩人集ひぬ

カルラ・ヴァージオ

月清しいまだ開かぬ文を掌に

エドアルド・サングイネーティ

しげき虫の音抱き合ひたる

関森勝夫

カラカラの遺跡彩り草紅葉

加藤耕子

空も地上もストのはげしき

野尻命子

足早に神父は衣ひるがへし

渡辺 勝

盲導犬のかしづきてをり

杏花

雪原の彼方母校の時計塔

忠男

凍て月照らす地震の空白

カルラ

心臓の鼓動を数ふ十二回

エドアルド

旅の疲れは杯に鎮めん

勝

ゴンドラに揺れて乱るる恋心

エットレ・コロ

友より奪ふ街のマドンナ

勝夫

あかときにしaurraの額輝きてエドアルド

耕子

春の暖炉に縫ひ進む絹

清子

花万朶俳諧の座のなごやかに

カルラ

没り日あたたか再会を期す

カルラ

一九九五年六月十六日満尾 於ローマ

*一九六九年オクタヴィオ・パス等四詩

人と「Renga」を試みた。

**「ラウラ」四行詩の確立者ペトラル

カが崇拜した女性。

連句と私

小室 初美

何十年前も前の夏、埼玉県は荒川の支流玉淀川に水遊びに行った。川巾は三十米くらい。日焼けした若者数名が向岸まで泳ぎ渡っていたが、大半はこちら側の岸でのどかにバチャバチャやっていた。私は自己流の犬かきで七八米泳ぐのがやっとなのに、どうしても向こう岸に渡ってみたいとなった。岸から十米くらいは背が立つのだから、ほんの数米泳げばどうにかなると思って水をかけた。が、川の中程は流れが速い。ななめにきり進めない。力がつきてきてブクブク。仲間が気付き若者に助けられもとの岸にもどれた。なりたてとは言え一人前の社会人、大いに恥じて仲間達に固く口止めをした。

石の上にも

近藤 守男

待望久しかったACCの「連句入門」に入れていただいで楽しく通っている。石の上にも三年と思ひ、続けるつもりである。

連句との関りは、八九年十月第四月曜日の四宮連句からである。佛淵健悟さんのお誘いであった。当夜は式田和子先生のお働きであった。表では、初手から苦吟の私に和子先生が力添え下さり、どうにか裏に進み、そこで酒肴が出された。酒が血流を促進し、やっと人心地がついた。しかし句作りは相変わらず難渋を極め、冷汗の連続であった。

「卯の花会」という男ばかりの会に健悟さんに誘われた。ここでも和子先生から度々のご指導をいただいた。なつかしい思い出としては、慶應病院に入院中の和子先生をお見舞いした折、先生の個室で、卯の花のひよこたちを相手に一巻まいていただいたことである。その後、連句の糸の切れかかる度、いろいろと支えられることがあり、両吟、文音も何度も経験できたが、その都度明雅先生にご講評を仰ぎ、懇切丁寧なご指導をいただいた。以来、猫養会の諸先生、宗匠、先輩の皆さんのご指導をいただき、「入門」に到った。

危ふきに遊ぶ日は何時

中野 昌子

三年程前の事、通勤電車の中でパラパラと「クロワッサン」をめくって興味を引いたのが矢崎藍さんの「ころも連句会」の記事であった。「もう一つの高級な趣味見つけませんか」という特集の中だと記憶している。早速出版された『連句恋々』を買い求めた。面白くて、一気に読んでしまった。尚、驚いたのは本の中に、以前からお付き合いある式田和子さんの名があり、連句会の大ベテランとして活躍されている様子。年賀状にその事を書いて出した所、式田さんから「家でやっていますから興味があればいらっしやい」とお誘いを受けた。大喜びで参加したものの、その後の「ザマ」は語るも涙、恥のメッタ塗りまで今日まで来ている次第。桃徑庵式田邸に通い始めて早や二年足らず、ACCに入会かかって半年、先生先輩方の鮮やかな発句、達人な付け合いに唯々目を白黒、溜息するのみ。かくして甚だミィハーなスタートを切った浅学非才、超凡庸な吾が頭が、「俳諧とは雅と俗との間を縫い危うきに遊ぶものなり」という憧れの境地に浸れるのは、一体、何時の日のことだろうか。

歌仙「花芭蕉」 東明雅 捌

花芭蕉庵に新たな翁像

顔も涼しげ竹杖と笠

葛切りの味のほのかに喉こして

ビデオで届く近況報告

名月の今は兎も棲みかねし

鳴き終へし虫庭に放ちぬ

遠来の友をもてなすあらばしり

気配りやさし年上の妻

優勝と胎りし嬰を両の手に

ポンポンポンとポプコーン出る

ファルーカは風いっばいにナイル川

絨毯敷けば神は真近に

文なしの我影照らす凍し月

ピカソに青の時代ありけり

モラス縫ふインディオの娘の無心にて

旧婚旅行は世界一周

明日のこと明日にゆだねて花浴びる

習ひて慣れて鱒のあめ炊き

村おこし曲水の宴復活す

硯の墨の匂ふたそがれ

保険屋の出来高競ふ棒グラフ

活字が嫌ひアトピーの群

原爆忌核実験のなほやまず

摩文仁の丘にひめゆりの塔

契りたる一世の恋に悔いはなく

マインドコントロール逆のセクハラ

アラジンのランプを借りて来たいとき

月をかすめて砂嵐過ぐ

家計簿も手書のひとのそぞろ寒

火だこを作るたんぼ焼く膝

きじ鳩の寄りそってゐる雪の枝

ギターつまびき流す芸人

代議士は票数ばかりあれこれと

ぼんぼり映ゆる雛様の笑み

夢に見る花は満開滝桜

ほろ酔機嫌春泥の道

平成七年七月十九日 於 江東芭蕉記念館

連衆 梅田利子 諏訪欣二 倉本路子

岡本道子

歌仙「夏深し」 市野沢 弘子 捌

川風にそよぐ草叢夏深し

水着の子等の賑やかな声

引き出しへ玉蟲包み納むらん

紫煙くゆらす縁側の端

月天心まっすくな道籠まで

編みし俵をトラックに積み

念願の文学賞に温め酒

年上女房さすが控へめ

うれしげに結婚指輪きらめかせ

ポケベルの鳴る雑踏の中

無党派層選挙参謀票読めず

鱈ちりつつく北国の月

どか雪に積りどかどか雪となり

網棚の荷のふいに消えたる

人形の腹に麻葉を押し込んで

あくび出さうな牧師説教

オルゴール花の真昼を奏でつつ

おらんだ坂を下るうららか

羊の毛刈れば羊のさっぱりと

おてんこ盛りの小屋の麦飯

済みしこと又催促の惚けはじめ

貧乏ゆすり何故か止まらぬ

パンストを脱がす背中の汗臭く

鏡天井彼の肩越し

たそがれの電光文字の流れをり

評判通り野茂の投球

濃紺のトートバッグに夢をつめ

盆の休みを告げる貼紙

盛り塩に月皓々と登り窯

秋の七種一つ忘れて

消しゴムのいびつの形父らしく

孫に語りし戦争の傷

円高も株の安値も底ならん

CDジャズを文鳥と聞き

峠路眼下に白き花万朶

春雷の後雲のゆるやか

敏

篤

同

敏

代

淑

代

敏

淑

代

敏

篤

敏

代

淑

代

敏

篤

同

淑

代

同

弘

同

代

同

代

同

同

歌仙「土用芽」 下鉢 清子 捌

なかんづく土用芽しるき薔薇の垣

清子

片蔭拾ひ川沿ひの町

婿

蜘蛛に触れたがる児が踊り場に

健悟

郵便受けにメールいっばい

代々子

皎々と月照り渡る操車場

碧

夜勤を終へて帰るやや寒

碧

おひろめの地酒待たるる文化祭

悟

ピエロおどけて投げキッスする

代

嘘つきのひとの残せし紅の痕

婿

新々宗教捜査着々

悟

ミャンマーはスーチー女史を解放し

碧

狐の提灯見えつかくれつ

碧

底冷の蔵の格子戸月さして

婿

全輪駆動ふるさとの径

碧

カラオケの賞金稼ぎとうたはれぬ

代

有給休暇きつちりと取り

悟

花ふぶく浮棧橋に人の群

同

三宝柑の香りほのかに

碧

大本山永平寺領鴉の巢

婿

優勝狙ふ強化合宿

代

目覚むればスクープ報道ゴシックで

悟

臍を嘔みつつ嘔るコーヒー

碧

薪能乱拍子踏み主役の技

代

羅を被て妙齡の鬼女

婿

帰さない介抱してと拗ねに拗ね

清

マザコンあやしベントツせしめる

悟

真贋の論争の裏面商肥え

碧

古雑誌よりかまどうま跳ぶ

望の月ビルの菜園覗くごと

予備校生が爽籟の中

代

方丈記おくのほそ道丸暗記

婿

シルバーパスで都内観光

碧

コラーゲンたっぷり入りし茶が流行り

同

文通の囲碁すでに終盤

碧

花の苑馬に試乗の夢ひとつ

清

G線上のアリアうららか

碧

平成七年七月十九日 於 江東芭蕉記念館

連衆 八代婿 佛淵健悟 橋野代々子

五味碧子 松本碧

歌仙「翁像」 中川 哲 捌

白蓮の微笑む如し翁像

哲

風ゆるやかに透る縮布

紀子

婦省子の話あれこれ増もなし

和弥

牛乳パック忽ちに空

達子

拾ひ猫すりよってくる月の宵

澄子

斧を挙げたるままに蟻螂

美恵

秋出水見舞の客のつぎつぎに

紀

門柱にある彼のイニシャル

弥

耳たぶにエンゲージピアス光らせつ

恵

特急のぞみひた走るなり

達

選挙区の後援会で吹いたほら

哲

厄払とてふんどしを捨て

鋸音の月光に牙ゆ谷深し

ドナウの流れ国境を過ぐ

弥

神父様長き法衣の裾を曳き

澄

人形芝居すでに開幕

弥

市中的花通り抜け通り抜け

紀

若布の椀に沈金の紋

同

十返舎一九の風邪も春興や

弥

八つぁん熊さん顔を見合はせ

達

摩天楼最上階の大パーティ

澄

輸入ワインに輸入野菜で

恵

あめんぼも知らぬ子供を育て来し

同

わたしのをんな度どのくらいかな

達

滅茶苦茶をしたい火傷もしてみたい

紀

縫針の穴遠く小さく

恵

納戸にも長廊下にも梁童

弥

失せものさがす婆さまの月

達

焦したるバター多めにシャンピニオン

澄

芸術祭に猿出番待つ

紀

綱渡りでんぐり返し一輪車

達

まなざし遥か故郷の山

澄

太公望釣れなくてよし釣れてよし

達

みんなで渡る薄氷の橋

弥

花宴笛や鼓の緋毛氈

哲

近き梢に巣組する鴉

澄

平成七年七月九日 於 江東芭蕉記念館

連衆 篠原達子 八角澄子 権頭和弥

椿紀子 山口美恵

歌仙「梅雨の門」 蒲原 志げ子 捌

降るといひ又降らぬとも梅雨の門 志げ子

雀の翅をふるふ真清水 孝子

夏期講習括弧でくくる式解けて 淑子

禁煙忘れさがすポケット 一恵

漆黒の空の片隅三日ノ月 治子

長夜の地下を工夫掘りつぐ 和代

新米の弁当を売る笑顔そへ 孝

いつもの列車あの娘気になる 恵

逢はざれば電話手帳にフアクシミリ 淑

領収証は出さぬ菩提寺 孝

棟上げの頭の渋き木遣節 淑

アールグレイのお茶をおかはり 代

月浴びて滑るスキーの童話めき 恵

狐が盗む銀色の魚 治

陰謀の仲間か公選弁護人 孝

隣の新聞のぞき読みする 治

北上へ一里あまりの花訪ね 孝

お広め屋ゆく弥生狂言 恵

古びたる旧約聖書鐘霞む 淑

荒れ野すぎれば死海鈍色 恵

飽食の塩で採みだす皮下脂肪 代

愛されてをりあるがままにて 孝

夢に聞く蚤のむつみごと げ

サマータイムでつる寝不足 治

やっちゃ場の車触れたる売り言葉 孝

景気直しに積みし菰樽 同

戦災も震災も知り路地ぐらし 淑

三代つづく江戸の指物 俳諧師異国の月を詠むならん

穴惑ひしてよぎる縞蛇 ナッ

粧ふ山天折の吾子眠る沢

へりで荷揚げの氣象観測

ジーンズの裾のフリンジすり切れて

やまと蛭の匂ふ味噌汁

花どつと散るも奢りの宴なる

掛け声高く揚る大風

平成七年六月二一日 於 源心庵

連衆 坂本孝子 金久保淑子 山崎一恵

加藤治子 長崎和代

歌仙「神輿瘤」

雑賀 遊 捌

肩脱ぎてこれみよがしや神輿瘤 遊

辰巳の風の吹き通る頃 和子

てんと虫絵本の縁を進むらん 健悟

紙縫教へる根気良き父 美恵

石投げ川面の月を騒がせり 弘子

秋味の報届く週末

菊人形最屑役者によく似たる

妻に内緒で定期解約

口紅のつきし煙草を捨てかねて

フリーウェイを飛ばすビュイック

ワグナーに心酔したる独裁者

熱燗酌めばおしゃべりになり

式台に並ぶ浅沓月凍つる

犬に曳かれてホームレスゆく

副都心公約通す知事のゐて

美術館建ち名画少々

豆腐買ふ道に逢ひたる花の雨

蛙握って走ることも等

老人の増ゆるばかりで山笑ふ

悩み明るく叩くワープロ

ブランドに凝りて頑張る自己輸入

色鮮やかな蜘蛛の潜める

ほろせ掻く指まで愛し蔵の中

一粒しほり根掛けがっくり

冬の浪借りたボートを押し流し

原発地帯蔽ふ静寂

連句とは森羅万象虚実混ぜ

月の光にCDを聴く

やや寒に時代遅れの真向法

鶴鴿の尾の石を叩きぬ

ふるさとを偲びつづけて半世紀

駅のごみ箱いつも覗いて

空を飛ぶ夢をフロイト分析し

土手にあはあはつくしんぼ伸び

花万朶誕生仏に散りかかり

独りの部屋に灯す春燈

平成七年六月二一日 於 源心庵

連衆 式田和子 山口美恵 市野沢弘子

佛淵健悟

歌仙「青梅や」 橘 文子 捌

青梅や「季寄せ」の手擦れはげしかり 文子

初蠅の透きとほる声 みづゑ

教室にポロシヤツの子等並びて 淳子

生地を叩きてクッキーを焼く 利子

月の海水尾を引きゆく漁り舟 麻子

景気談義の果てぬ夜仕事 政治

乾盃の音頭を取りし今年酒 利

同志を募るチョンガーの会 麻

訳知りの姉さん女房に甘ったれ 淳

二人の間に入る三毛猫 ゑ

髪伸びスピード出世に追いつかず 淳

お金のことは全てお任せ 麻

取っつきは何でも屋なり月冴ゆる ゑ

牡蠣に海鼠に蕪に切干 淳

胃カメラを撮れと流行らぬ街の医者 利

テレビ吉宗元氣印に 麻

小鼓の音響き来る花の昼 淳

甘茶参らす尺の釈迦牟尼 志

山笑ひ初めし頃より陶土掘り 利

納戸に積めるバザー用品 淳

南北の和して難民溢れたる 利

水煙草吸ひ憩ふ緑陰 ゑ

翡翠の雌に捧ぐる魚一尾 利

恋の翼で越えし高嶺 志

目覚むれば瓦斯の火燃えて嬰も居て 麻

処女の無き世を嘆くドラキユラ 利

塵埃の山どつと吐き出すOA機 ゑ

地球にやさしと云へば売れ筋 麻

半生の心に残る月幾つ 利

変らぬものに江ノ島の松 淳

少年の夢を育む鬼やんま 麻

作曲に凝り漫画にも凝り ゑ

ベルギーへスケッチ旅行誘はれて 淳

春の帽子のつば上げてみる 文

ゆるやかに枝揺らしをり花大樹 文

根付の鈴を鳴らす夕東風 志

平成七年六月二十一日 於 源心庵

連衆 山口みづゑ 上月淳子 梅田利子

内田麻子 峯田政志

歌仙「夏至近し」 豊田 好敏 捌

夏至近し葛西の駅に風通る 好敏

青葉隠れに伸びる舗装路 瑞枝

浴衣の子くびれた足を投げ出して 智恵

シュークリームをふくらと焼く 路子

月代に待ちたるものくる氣配 あかり

囀の籠のすこし揺らぎぬ 子

ことし酒自慢の出来と杜氏言ひ 恵

掌中の玉むすめ窯ぐれ り

甘い声甘いマスクにすぐころり 恵

王座の価値はいまやがた落ち 敏

羊頭をかかげ狗肉を商ひし 子

サイレンいくつ過ぐる遠火事 枝

山門の聳えたり寒の月 恵

在日三年免許皆伝 枝

椀こそば早食ひいつか身につきぬ 恵

不況知らずで太るコンビニ 子

大江戸は邪教争乱花吹雪 枝

目かる蛙をちよつと蹴飛ばし 子

野茂投手トルネードにていまや春 子

積み荷重たき隊商の列 子

天平の御物の琵琶のさびさびと 枝

眠れば夢に獺がでてきた 恵

ダイバーのグランブルーに追ふ魚群 枝

心臓手術名医なる友 恵

顔埋む胸は嘘つく鼓動して 枝

おんな殺しのしけた嘶家 子

持て余す世界都市博入場券 子

鴉を防ぐ生ゴミの網 枝

船を曳く月の浜辺の雲迅く 子

黄色主調で描くまるめろ 敏

秋扇要ゆるみし老いの果て 恵

キリエレイゾン澄めるユニゾン 枝

大時計長針進むくせのあり 子

ふはりふはりと遊ぶ初蝶 子

根を継ぎて生かす大樹は花万葉 子

機械づくりの草餅を買ふ 敏

*キリスト教の賛美歌 子

平成七年六月二十一日 於 源心庵 恵

連衆 大窪瑞枝 須田智恵 倉本路子 枝

中田あかり

歌仙「邸松」

東明雅 捌

邸松涼しき風の通ひけり

紫蘇の香りを添へる盛鉢

パソコンの詩作漸く緒につきて

爪の形も似たる父と子

悠久の大河を照らす望の月

ちっち蟬聴く山の枝徑

又三郎どんぐりこぼし駈けてゆく

離れの気配一寸と絶える

妖怪の集団見合いつか済み

まづ年増からくどく定石

候補者のポスター皆笑ひをり

冬の鴉の遊ぶお台場

寒月の光の躍る小夜曲

徳利に満たす山形の酒

摩訶般若波羅蜜陀心教お守りに

灌頂曆名仰きみる人

世界から花衣着て花見客

磯の口開響く潮騒

浜焼の鯛の太さに目をみはり

猫十匹と暮らす楽しさ

荒れ果てたスコットランドゴルフ場

高飛車に出る執事独身

煩惱の現し世の夢恋三昧

汗疹できたは抱擁の果て

百年の大屋根の庭蝮棲む

金銀財宝踰踰の下

めのご算玉串料のはらづもり

恵 幸 碧 敏 義 敏 同 樹 恵 碧 幸 英 義 英 幸 恵 碧 敏 樹 幸子 常義 碧 好敏 美恵 好敏 碧 常義 幸子

木の葉山魚を焼いて出すシェフ

草枕旅の一座の後の月

夜霧に濡れて惚ぶ故郷

赤煉瓦煤けしままに暖炉燃え

スキー合宿にぎやかな群れ

視察団ホテルラッシュのアトラクタ

税申告にねちり鉢巻

淡墨の桜は花のまっ盛り

田打ち畦塗る谷深き里

平成七年七月二十九日於中村橋佐古邸

連衆 佐古英子 青木秀樹 山口美恵

豊田好敏 松本碧 生田日常義

瀬野幸子

歌仙「芒原今昔」

坂本孝子 捌

芒原今昔白うつなぎけり

水ひそやかにほしる明月

炭で焼く秋刀魚に優るものもなし

3DKに子供三人

営業の売りは専らレジャーカー

折線グラフ下がる年の瀬

雪深き修道院に酒醸し

唾の男の腰に鳴る鈴

旦那のお婆さんに手をとられ

スクエアダンスに恥ぢらひしこと

クレーンの聳ゆる丘の新開地

敏 代 敏 町 代 同 瑞枝 淑代 好敏 孝子 千町 英 恵 樹 幸 敏 英 敏 碧 雅 碧

尺取虫が尺さむ窓

月涼し筑紫の琵琶の撥さばき

海に沈みし兵を弔ふ

岬には野生の馬の駈けめぐり

礼状かねて出した絵葉書

本日は舞台稽古と花の宴

ショウウインドウに春のスカート

石膏のトルソーの肩朧にて

煙草ばかりが光る張り込

責任を取らぬ上司は栄転し

櫓の上で叩く打出

人形振りなこの帯に緋縮緬

抱けば肌の蛇が悶える

メイストーム小鳥の恋は奔放に

宿り木の名となりし少年

牛乳の配られてくる音のして

看とりの椅子にさまよへる夢

ピバークの月更くるらむチョモランマ

うそ寒の銭もらふ皺の掌

高機に緋を織れば雁わたる

コレステロールとかす杜仲茶

大のつく画伯文豪あなくなり

うちも隣も中流の上

花八分そぞろ歩きに灯が潤み

難遊びの飽きてうたた寝

平成七年九月十四日 於緑華亭

連衆 原田千町 豊田好敏 浅賀淑代

大窪瑞枝

敏 孝 枝 町 敏 枝 孝 代 町 同 代 町 敏 町 敏 枝 敏 枝 町 代 同 敏 代 同 枝 町

連句とRENKU (2)

浅賀 淑代

初潮を突ききって飛ぶ舳先かな 明雅
近づく島の山も秋めく しげと

去る八月下旬、佐渡畑野町で天の川連句会主催の「第三回天の川を見る会・連句会」が行われ、島外からも明雅先生をはじめ十数名がジェットホイールに乗り込みました。

同連句会は、今回も、米国(ミルウォーキー)のハイク詩人らがファックスで送ってきた歌仙“Street of Dreams (夢の道)”の前半に、後半(近藤蕉肝氏抜き)をつけて一卷を完成させています。

dream of the shady side
a street lived on
too long ago
Karl Y.
(片陰や昔住みたる道の夢 カール・Y)
heat of a crowded bus
urban jungle
Doug
(バスの暑さよ都会ジャングル ダグ)

このような発句、脇で始まった前半には、星、植物などの自然を詠んだ句、夜なべの裁縫やガレージでの車の整備などの生活句、有名な大リーガーらの死を詠んだ無常の句などがあり、付け・転じも意識され、前号で紹介した歌仙“Winter Rain” (“フロッグポ

ンド”)とはさすがに趣が異なります。

海外の人々と連句を行う場合、式目の適用、季語、翻訳など、さまざまな問題が障壁となります。それゆえに大方が国際連句の将来の展望に消極的な考えにとどまりがちです。

ここ数年、国際連句協会などの海外での努力もあって、「式目」(翻訳された「ルール・ブック」)に従って連句が試みられるようになってきました。しかし、問題は、句数・去嫌、月・花を詠むこと、表の禁忌など「式目」が海外の人々のものとしてその腑に落ちるまでに、かなりの時間がかかり、しかも現地に適切な指導者が必要だということでした。

季語も日本のものが、“HAIKU HANDBOOK”(ヒギンソン著)などに翻訳され、日本人の季節感が紹介されています。しかし実際には、日本の季語が海外の人々の季節感に必ずしもマッチするわけではありません。例えば、「夢の道」十七ノオ折立を見てみましょう。

white catalpa trumpets
open throats
wait for thunder
Karl G.
(喉開けて凌霄の花雷を待つ カール・G)
ducks return
to those who stayed
Doug
(残りしものに鴨帰り来る ダグ)
甲板ワイン酌み合ふ陽のうらら 淑代
(up on deck / drinking wine together / sun sparkling bright Toshiyo)

ミルウォーキーは、緯度を見ると札幌あたり、春の遅い地方です。「花」は夏のイメージが強いようです。しかも季語が定着していませんから、凌霄花といっても、春とも夏ともはっきりとしないのです。鴨は、「帰り行く」のでなく、「帰り来る」ものです。さらに、「うらら」という日本人には共通する春の気分も、彼らには異なります。春の陽の明るさ(sun sparkling bright)を詠んだオオ折立の句ですが、北部の人々にとって、さらさらとした陽の輝きは「夏」のものであり、理解を得るには説明を要するようです。

現在、米国では、独自の歳時記(季語集)が編纂されつつあるようですが、日本でも、季語は一朝一夕に整えられたわけではありません。その国の人々の共通項として発酵するにはそれなりの時間を要することでしょう。従って、日本の式目や季語だけを約束事とした俳諧の場を急がずに、まず「連句の楽しさ」そのものを理解してもらおう、つまり私たちの蕉風現代連句をたくさん読んでもらうことが、バイリンガルの捌き、翻訳者を養成することと併せて、国際連句の第一歩ではないでしょうか。そのような意味でいえば、前半、後半を補完する「天の川連句会」方式は、ひとつのおもしろい試みといえましょう。今回、待ちに待っていた私たちに、ミルキーウエイ(天の川)は、たった三十分でしたが、その淡い浪漫的な姿を見せてくれました。

海の記憶

椿 紀子

いつのことだったかはっきりしませんが、太陽が沈みかけて金色に輝く海を沖へ沖へと泳いだことがあります。ビロードのような引き潮に身をゆだねていると不思議に思わずかな安らぎに包まれ、どこまでもどこまでも行けるような心地がしました。

「海の記憶をお持ちでしたら少し分けてください」と或る日ヒラメが言いました。

ほとんど水の濁れた井戸の底でタイとヒラメに出会ったのです。「もう長いことここにいるので、海のことにはあまり思い出せないのですよ」とタイが言いました。

そこでわたしは「海の記憶」ファイルを呼び出しメモリーを遡って、四億年も前に鯉呼吸しながら陸に上った勇敢な魚の記憶から始めました。

鱗木類や藍藻類の間を泳ぐ奇妙な生き物は三葉虫やうみりんご、古事記の蛭子舟やノアの方舟、海幸彦に乙姫様、平家の公達の海都、遣唐使たち、アラフラ海の真珠採り、大航海時代の船乗りや海賊、堀割が四方八方に通っていた江戸の町、太地のくぢら、もちろんモビイデイクも。人間魚雷の兵士たち、戦艦やまと、ムルロア環礁のグランブルー、光通信ケーブルのたくる海底、そして無数の

魚や鳥。

中でも浜の産屋で鰯に身をかえて子を産んだ玉依姫の記憶……。敗戦前、太平洋の荒波とどろく村で末の娘を産んだ母は疎開暮らしの明け暮れにどんな海を見たでしょうか。

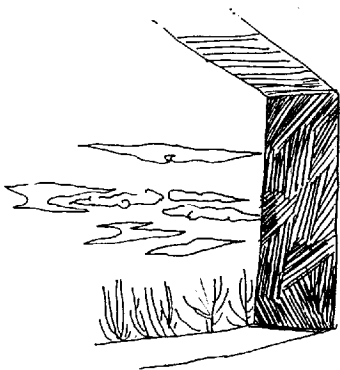
自分の中に海を抱える女の特権は、今老いたる母の海まで抱え込んで、日毎にその妄想の井戸の底まで降りてゆかねばなりません。がらくたのように積んであるのは母が捨て

てしまった記憶です。タイやヒラメはその中で迷子になっていました。わたしもです。

わたしの記憶がわたしのものではなく、目のくらむような遠い祖先からの集積であるなら、母の口から遂に聞けなかったその記憶も、どこかで生きてゆくというのか。

わたしはタイとヒラメに「海の記憶」を少しずつ分けてやり、あの亀の待つ浜で、「再見（ツァイチェン）」と言って別れました。いつかきくと、きんいろの波をどこまでも泳いで自分の海に帰りたい。

あ、母がなにか唄っています。



* 連句と酒 *

「行々子庵」

中川 哲

濁り酒、鱈、烏賊、真鱈、氷見の宿

杉亭

早いもので、行々子庵杉亭さんを失ってからもう一年が経ってしまふ。

A C Cの先輩だった貴方にお会いしてから十年の間、風雅の先達であり、こよなき酒友として、連句の席はもとより、新宿や吉祥寺の酒亭で江戸俳諧や歌舞伎の話で夜の更けるのを忘れたのも、何十回におよんだことか。

サワリといへば、梅川やお俊の口説としか思はなかった私に連句のイロハを教へてくれたのも有難いが、酒の楽しみ方、食物の嗜好、身なりのお洒落を通して、俳諧の心を伝へて貰った。

今頃は、真如の月を詠みこんだ酒恋の風雅を、懐かしいあの人この人を集めて、膝送りを楽しんでゐることであらう。酒はきつとあるだらうが、生臭物の旨い魚があるかどうか心配だ。

猫養会案内

▽「猫養作品集VI」作品募集

- 形式は自由
- 一人一篇（捌き）
- 原稿用紙はB4判で
- 締切は十一月末
- 作品については東明雅先生が審査致します。
- 送り先
〒二七七 柏市加賀二一十二一十一
梅田 利子 宛

▽猫養連句会

- 日時 平成八年一月十七日（水）
十二時より
- 場所 江東芭蕉記念館

SSS 著書紹介 SSS

『連句で遊ぼう』 水沢 周 著
新曜社刊 ¥一八四五

著者は故行々子庵杉亭さんと親しくしていた方で、猿楽座という会を主催しています。

〒一〇一 千代田区神田神保町二一十

多田ビル

TEL 03-3264-4973

草間時彦

杉内 徒司

俳諧時雨忌（昭和四十六年十月十日）の原稿を角川書店編集部谷崎昭男氏に届けてくれないか、と義仲寺史跡保存会大庭勝一常務理事から頼まれた。

谷崎氏は谷崎潤一郎氏の甥、角川で石田波郷全集の担当だったが、その結婚式に呼ばれた大庭常務は角川源義社長から草間時彦氏を紹介され、その人柄に感服したという話をその折伺った。

まだ俳句文学館が出来る前、俳人協会が新橋三丁目の烏森ビルの六階にあった頃だから草間さんの理事長就任前の事であろう。

俳諧雑誌「杏花村」の俳諧壇消息を担当していた頃、俳人協会主催の「連句の集い」

（昭和五十二年六月十八日）を取材に覗いた処、捌きを手伝わされてしまった。当日の立句は、

瀧落ちて群青世界とどろけり（秋櫻子）

で、捌きは阿片瓢郎、草間時彦、山田みつゑ、徒司の四名。

「連句の集い」は月一回で翌年七月まで十三回も続き、皆勤の捌きは結局私一人だったせいも、主催者から大事にされ、草間事務局長から近くの小料理屋「くろがね」で再度供応にあづかった事もある。

鳴立庵十九世山路閑古（昭和五十二年四月没）の後の村山古郷廿世の襲号祝賀に草間さんの立句で付廻歌仙を贈ったのもその間のことであり、尚私は図に乗って受講生の実作錬磨のためと称し、俳句文学館講堂を会場として、杏花村塾、現代連句協会主催で全国連句大会を左の如く二回開催した事もある。

- 第一回 昭和五十二年十一月六日（日）
- 第二回 同 五十三年六月十一日（日）

草間さんが「猫養庵発句集」に寄せた跋文によると、私が五十五年草間さんに明雅さんを引合せたとあるのは年齢のせいで覚えてないが、考えてみると、草間さんに押れ親しみ、連句が俳壇に異端視されていた時代だけに、俳人協会理事長が連句にこんな打ち込んでいて大丈夫かなと秘かに懸念した事もある。

が、そんな事は全くの杞憂だった。村山古郷没後草間さんは廿一世を襲号された。

「現代の俳人で、これほど連句を理解し、また堪能な方はない。この人を得て、三千風以下、歴代の庵主たちもさぞかし喜んでおられることだろう。早く御入庵のお祝いを賑かにやりたいものである」と明雅さんは書いている。

その祝賀会（昭和六十二年九月三十日）の素晴らしかったこと！

